

農地等の土壌流亡軽減対策 【緑肥の効果と注意点】

近年、温暖化などの影響で集中豪雨が発生し、農地などの土壌が浸食（土壌流亡）される被害が頻発しています。土壌流亡軽減対策は、農家の皆さんと関係者が協力して対策を進める必要があります。

緑肥を活用した土づくり

緑肥とは、栽培した植物を土にすき込んで肥料として活用することです。緑肥の活用により、有機物の補給や土壌の物理性を改善するほか、緑肥作物の種類によっては土壌病害や有害線虫の抑制や植物が土を覆うことで表土流亡を抑制する効果も期待できます。そこで、高冷地で主に利用されているイネ科緑肥作物の使い方を紹介します。

は種時期と施肥量

高冷地で活用されている主なイネ科緑肥作物として「エンバク」「ライムギ」があり、ライムギは耐寒性が強いのが特徴です。そのため、8月中はエンバク(ニューオーツ等)、8月下旬～9月中旬までがライムギ(ライ太郎等)が栽培されています。また、越冬に適応するライムギ(R-007 等)では10月上旬頃までは種をすることができます。なお、緑肥作付けにあたり基本的には無施肥で栽培できますが、土壌養分が少ない場合は、状況に応じて窒素成分で5kg/10a程度を施肥してください。

は種作業

緑肥作物の種子(種子量はメーカーカタログなどを参照)をロータリーソフ等により土を浅く(深さ3～5 cm程度)混和します。小面積の場合は手播きや散粒機を使うこともできます。しかし、覆土がないと乾燥による発芽不良などが発生するため、レーキやロータリーなどで覆土をしましょう。また、ローラーなどで鎮圧すると、種子の流亡抑制や発芽率の向上につながります。

すき込み作業

作物が大きくなれば多くの有機物を得ることができます。しかし、分解に時間がかかる、種子が落ちて雑草化する、ロータリーの爪に絡む、などの弊害も発生することから、イネ科緑肥は出穂始期までにすき込むようにします。すき込みは地上部をモアなどで細断し、プラウやロータリー等で行います。(草丈が低い場合はロータリーのみですき込みでも可能です)



イネ科緑肥作物の根の生育



緑肥作付けほ場と豪雨による表土流亡(赤枠内)



緑肥細断後のプラウによるすき込み

< 緑肥導入における注意点 >

- ・雑草の発生が多い場合は雑草に負けないように、よくロータリーで混和・整地してから種を行います。
- ・緑肥すき込み後、作物を栽培する場合は、すき込み後の腐熟期間が短いと発芽や初期生育に影響を受ける可能性があるため、1 カ月程度の期間を空けましょう。また、タネバエ等の害虫発生を防ぐために、適用のある殺虫剤の使用等の対策も検討してください。

【問い合わせ先】吾妻農業事務所普及指導課長野係 TEL:0279-82-2054

長野原町役場産業課農林係

TEL:0279-82-3013